



鶏けいめい鳴

〒221-0864

横浜市神奈川区菅田町2851

(電話 045-473-7191)

パウロの言葉

「苦難をも誇りとしませう。わたしたちは知っているのです、苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生むということとを」

聖書(ローマ書5章3～4節)

牧師 河合裕志

苦難を誇る、なんて普通は言わない。苦難、苦しみなんてご免だ、あっちへ行ってくれ、これが私達というもの。ところがパウロはこれを誇りにするなどと言う。これは一体どんな神経か、わからない。

彼が誇りとする苦難はどんなものだったか。これは第1コリント書11章に詳しい。一つあげればこんなものがある。「ユダヤ人から四十に一つ足りない鞭を受けたことが五度」。これホントかな。ホントなんでしょう。これはすごい。39回にわたる鞭打ちを五度も味わったと。彼の背中のみみず腫れが縦横に走っていた。

これをしかし誇る、自慢する、そこには彼なりの論理があった。こんな考え方の道筋。苦難→忍耐→練達→希望。結局は希望に至る、だから苦難を誇るんだと。そんなにうまくいくものか。

まず忍耐を生むと言うけれどどんなものか。これは言えるかもしれない。苦しみにじっと耐える、がまんする。これでもか、これでもかと次々と苦難が押し寄せる、これを受けて立つ、そうするとそこに忍耐力がついてくる、忍耐力が養われる、という

ことはあるだろう。

養鶏業で一家をなした齋藤虎松さんは辛抱を強調している。仕事、成績が思うように行かない時にも投げ出さない、また良くなることを期すこと、こうして事業を成功へと導いた。とに角苦難は忍耐、辛抱の思いを強めてくれるなら無駄じゃない。

次には忍耐は練達を生むと。これも肯定できそう。人間、苦しみにじっと耐えている程に黒光りしてくるのでは。人生の対し方が練られてくるのでは。何事も練習に励む程に習熟の度を増して来る。技術、芸事の分野で第一人者、練達の士となって行く。苦難も練習もラクなものではないけれどこれに耐えることにより人間は強くなる、成長する。

最後、練達は希望を生むと。これもその通りに違いない。練達の域に達すれば希望はふくらむ。一定の地位と収入を得ることが出来る。これを希望として励んだらよい。

ただパウロの場合の希望は収入は眼中にない。地位はあるかも。それはこの世を去った時に天国に迎えられるということ。この大目標・希望に向って苦難をも誇りとし前向きに取り組んでいった。これがパウロ流。

集会案内

日曜礼拝：午前10時15分、日曜夕拝：午後6時

子どもの教会：日曜日午前9時

求道者会：日曜日午前9時40分

中高青年会：日曜日礼拝後

お話し会、卓球：水曜日午後1時～7時

お祈り会：水曜日午前6時、午前10時、午後7時